北海道教育大学学術リポジトリ
Hokkaido University of Education Repository
国立大学法人 北海道教育大学
HOKKAIDO UNIVERSITY OF EDUCATION

転出教員から見た山村留学の教育効果と教員意識の変容：北海道S町を事例として

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-07-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 玉井, 康之, 川前, あゆみ メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00004748

北海道教育大学紀要（第１部Ｃ）第48巻　第１号
Journal of Hokkaido University of Education (Section IC)Vol. 48, No. 1

平成９年８月
August, 1997

転出教員から見た山村留学の教育効果と教員意識の変容

―北海道Ｓ町を事例として―

玉　井　康　之・川　前　あゆみ

１．はじめに

現代社会において，子どもの生活環境・自然環境は日々悪化している。物の豊かさとは裏腹に家庭生活や地域社会の希薄化など，子どもの生育環境を変貌させ，地域の社会関係・人間関係といった外界から学ぶべき体験が得られにくい状況になっている。このように，子どもの自然体験・生活体験・社会体験の欠如が問題となる中で，農山漁村における山村留学が，徐々に注目を集めてきている。

山村留学とは，都市部に住む子どもが農山漁村の家庭に住民票を移して一定期間定住し，地元の小学校あるいは中学校に通うことを言う。地元の子どもと学校生活や遊びを共にすることで，都市部では得られない自然体験や地域の人間関係・社会関係を直接体験するのである。1976年に長野県八坂村で始まった山村留学は先駆的な役割を果たし，その後，全国各地で山村留学を導入する自治体が急増した。しかし，これまでの山村留学の先行研究では，自然体験や勤労体験などの体験学習内容や，山村留学に参加する側の意識分析に傾倒した研究がほとんどであり，山村留学を長期的・継続的にとらえつつ，山村留学を受け入れる地元や学校の意識を明らかにした研究はなかった。山村留学を導入した地域や学校が山村留学をどのように評価するのかを明らかにすることは，今後の山村留学の方向性を規定するものであろう。

これまで筆者らは，山村留学実施数が最も伸びている北海道を取り上げて調査を進めてきたが，行政の意識からは，山村留学に対して非常に高い関心を示し，将来的に導入を検討している町村が多いことが分かった。特に過疎化が激しい農山村において，地域を活性化させるためには，学校教育の充実が一つの重要課題となっている。山村留学を実施している多くの町村は，学校存続のための言わば手段として山村留学を導入したが，その効果は単なる学校存続の効果のみならず，山村留学に参加する側はもちろん，受け入れる側である地元のあらゆる社会諸階層から高い評価が得られた。

本稿では，以上のような山村留学研究の一貫として，教員の評価に限定して分析することを課題としている。とりわけ，山村留学を客観的・多面的にとらえられ，尚且つ教育専門職の立場から山村留学の教育効果をとらえることのできる転出教員の意識調査結果に限定してとらえる。なぜなら，現時点で山村留学に関わっている教員たちは，問題を抱える児童生徒たちと日々格闘してはいるが，１年か２年の長期的な視野に立って児童生徒の成長及び教員自身の成長をとらえることは難しいからである。一般的に，山村の小規模校には若い教員が多く，若い教員ほど，この傾向が強くなることは否めないからである。

この意識分析の中でとらえるべきことは，第一に，山村留学を導入したことによる留学生・地元生への教育効果であり，第二に，教員が山村留学に直接携わったことによる教員自身の意識の変容である。

これらを明らかにすることにより，教員の負担ばかりが強調される山村留学制度であるが，子どもだけではなく教員自身の意識にも積極的な変化が見られることが明らかとなる。実際に教員の負担が大きいことは

事実であるが，山村留学制度を契機として教員自身の成長にどのような影響を及ぼしたのかを明らかにすることは重要である。

ここでの分析方法は，転出教員の山村留学制度に対する意識を明らかにするために，統一的な統計調査と自由記述から広くその意識をアンケートによりとらえた（注1）。今回の調査資料は，山村留学制度導入時の1988年4月から1996年3月までにS町立U小学校・U中学校のいずれかに勤務していた教員30人を対象とし，1996年10月に郵送調査で行ったものである（注2）。25人から回答があり，回収率は83.3％である。

表1　留学生が山村留学で良い体験ができたかどうかに関する転出教員の評価

項　　目	人数	比　率
非常にできたと思う	15	60.0%
できたと思う	10	40.0%
少しできたと思う	0	0.0%
あまりできたとは思わない	0	0.0%
できなかったと思う	0	0.0%
分からない	0	0.0%
合　　計	25	100.0%

注1　1996年調査より川前が集計。以下表は同様。

表2　転出教員から見た地元生にとっての都会の児童生徒と交流する意味

項　　目	人数	比率
非常に大きな意味があった	6	24.0%
大きな意味があった	11	44.0%
少し意味があった	5	20.0%
あまり意味はないように見える	2	8.0%
分からない	1	4.0%
合　　計	25	100.0%

2．山村留学導入による地元生・留学生への教育効果

転出教員から見た地元生・留学生にとっての山村留学の教育効果を見ると，留学生の山村留学での体験の効果では（表1），「非常にできたと思う」が15人で60.0％と多く，さらに，「できたと思う」が10人で40.0％とすべての教員が積極的な評価をしている。また，地元生にとって都会の児童生徒と交流する意味に関しては（表2），「大きな意味があった」が11人で44.0％と最も多く，「非常に大きな意味があった」が6人で24.0％と次いで多い。「少し意味があった」も含めた積極的な評価をした教員が88.0％であり，留学生の評価よりも少し低いものの，ほとんどの教員が高く評価している。このように，地元生・留学生の双方において山村留学が効果的であるという意識を持っている。

次に，山村留学を契機とした教員の地元生に対する意識の変容を見ると（表3），「素直さ」「順応性」「寛容性」など田舎の子どもに対して一般的に言われる牧歌的な面を，山村留学を契機に改めて認識させられたとする教員が多数を占めている。「地元生は，留学制度を理解し，立場を認め，とても親切」にしていたという教員もおり，地元生の純粋で親切な面を評価している。地元生が，どのような子どもが留学してきても，それを受け入れる寛大さがあることを，山村留学制度を通して教員の意識から明らかになった。

また，地元生が，「都会の子どもを見て自信を持ち，負けん気も出てきた」「プラスの影響は受けてもマイナスの影響を受けない心身の逞しさ」があるとする教員もいる。このように，一般論として農村の子どもは，のんびりし過ぎて社会性がないとか，引っ込み思案，閉鎖的であるとされているが，山村留学を契機に，農村の子どももこれまで見られなかった積極面が教育効果として現れている。

3．転出教員から見た山村留学導入による児童生徒指導上の困難点

ここでは，多様な環境で育った子どもと地元の子どもが共に学校生活を送ることで，教員が児童生徒指導上でどのような困難があり，今後どのようなことを改善すべきなのかをとらえていきたい。転出教員の意識からとらえていくと大きく次の3つに分けられる（表4）。

第一に，「留学生の問題行動」を指摘する意見が最も多い。それは，不登校であったり，非行歴，性非行，

表3　山村留学制度を経験したことによる地元生の変容に関する転出教員の意識

ケース	自由記述意見
2	どんな子でも受け入れる素直さ・暖かさがあると感動したことも何度かあった。
4	小規模校では、幼いときから同一の環境で、他から子どもが入ってくることは、地元生にとって良いと思う。
5	留学生は、目立つ存在である。ちやほやされることが多くあり、地元生がちょっと可哀想になることもある。
6	子どもというのは、大変寛容であり順応性があると思うようになった。
7	素直・純粋ではなくなった「田舎の子ども」というより、情報化の進んだ子ども達、と視点を変えてみれる。
8	特にない。
10	子どもは順応が早く、留学生とも分け隔て無く接する。地元生の枠、序列は簡単に崩れ、交友関係が広がる。
11	留学生からプラスの影響は受けても、マイナスの影響を受けない心身の逞しさを地元生の中に観ることができる。この強靭さが留学生に影響し、留学生を変えていくものと思われる。
12	子どもの世界でも外的要因による刺激が必要であること。それによって、大きく変わることを認識した。
14	多くの経験を通して協力的になった。
15	幼児期から限られた人としか接してこなかった子ども達にとって大きな良い意味での刺激となったと考えている。
17	地元生も都会の子どもをみて自信を持ったし、負けん気もでて積極性がでてきた。子ども本来の姿・心情には都会っ子も田舎っ子もないものであることを再認識した。
18	地域の子ども達が、留学生の多様な個性に接し、自己形成に刺激を受けたり、良い意味の競争意識が育つ。
19	留学生がいることで、いわゆるおとなしい子は少なく、活動的な子ども達が多いと感じた。
20	それぞれの地域の特徴があり、そこに馴染み溶けこんでいける教育の在り方。
21	自分たちの生活以外、特に都会の生活を知らないし経験も乏しい。これを補う教育活動が必要である。
22	思いやりの心が以前よりも増したと思う。
23	留学生に対して地元生は、留学制度を理解し、立場を認め、とても親切で身の回りの面倒をよく見てやった。学級の雰囲気が明るくなった。
24	どこの子どもも同じである。

学習意欲がない等，個々の子どもが様々な問題を抱えていることによって，それに対する指導が大変であるとする教員が多い。児童生徒の個別的な指導はもちろん，問題を持つ子どもが転入してくることによる学級経営にも困難が生じたとする指摘もある。さらに第二には，留学生と地元生との仲間づくりや地元生が感化され過ぎるといった「地元生と留学生との調和」に困難があったとする指摘である。第三には，「高校受験に関する指導上の困難」の指摘も多い。それは，北海道と他の都府県との高校入試制度の相違や情報が入りにくいといったことによるものである。北海道内の高校受験であれば情報も入手しやすいが，留学生が全国各地の高校を受験することで，都府県毎の情報を入手しなければならず，その負担は計り知れないものがある。進路指導において，失敗は許されないという重圧と責任が教員にはあり，中学3年生の受け入れに関しては教員にとって大変な労力を費やさなければならないし，精神的な負担にもなっていることがうかがい知れる。

その他には，保護者との連絡不足や日常的に相談ができないといった指摘，地元地域住民の制度反対意見や里親の不足等による制度運営上の問題が生徒指導にも影響したとする指摘がある。

以上のように，転出教員から見た児童生徒の指導上の困難点には，留学生の質の変化や地元生との調和，他の都府県の高校入試に関する進路指導などの多くの指摘がある。さらに，教員が留学生の他の都府県における高校入試に関して，どの程度まで責務を負うのかということも議論となっている。それは，本来の山村留学の趣旨から鑑みれば，受験競争の予備校のように山村留学を位置づけるのではなく，高校入試については北海道の受験以外は関与しない旨の態勢をとって然るべきだからである。

表4　転出教員から見た児童生徒指導上の困難点

ケース	自　由　記　述　意　見
2	自分の殻に閉じこもり泣くことが多く調子が良い。学習意欲がない等問題が多かった。当初、留学生には地元生も当惑していたが、暖かく見守ってくれた。
3	都会の子に、比較的純朴だった地域の子が引き回される傾向が見られた。
4	留学生2人が不登校で、苦労した。出身地の高校受験の際、前の学校や父母との打ち合わせ等大変だった。
5	都会の子は田舎の子に比べ自己主張が強い。集団不適応等児童に問題がある場合は学級指導で苦労した。
6	地元生との仲間づくりが大変。特に個性の強い子どもであれば学級集団作りに割く時間や苦労は決して少なくない。
7	学級経営では、登校拒否・生活不適応などが多く指導法を検討。また、ホームシックに対する指導。進路指導では、相手校からの情報が入りにくい。
8	出身県の高校受験時は資料が少なく大変だった。地元生と同じように対応していたつもりだが、病気で休んだ時等地元生より多く家庭訪問をしていた。
9	他県の入試制度との違いに少し戸惑いがあった。喫煙。地元生との交際問題。小規模の校舎の破壊。
10	特に大きな問題はなかったと思う。
11	盗癖や喫煙癖のある留学生の場合、地元生に影響を与えないように留意する中で、親代わりの立場で復元させた。
13	非行問題での指導。他県の高校入試制度上の違い。家庭訪問の経費と日時確保の問題。性非行等、地元生への影響。
14	情報収集等の不足により、転入してから諸々の問題が生じた際に若干の苦労があった。
15	特になかった。
16	都会で子どもどうしの人間関係で、学校に登校できない子が多かったが、一日も休まず登校していた。
17	運営組織の数が多くなり、その負担が大きい。里親を確保することが困難。これらの運営上の問題が生徒指導上に影響したと思う。
18	留学生の生活歴や個性を理解しない教師との間に摩擦が生じ、里親との人間関係を阻害していた。
19	都会の子で口は立つが仕事をしない子がいてよく喧嘩をしていた。留学生の募集のため、資料を作ったり、本州方面に出向くこともある。
20	地域全体の理解不足によるトラブルがあり、再三話し合いを持ち、事あるごとに理解を得るように働きかけてきた。
21	性非行の対応・進路指導における他県の入試制度に対する苦労。
22	登校拒否の子どもの取り扱いで苦労した。
24	留学生の問題点を親や本人は隠そうとし、転校前の学校指導要録にもそれらしいことは書かれていないため、手探りで指導し始めることに特に不安がある。留学生がもたらす非行・問題行動は、万引き・喫煙・留学生同士の傷害・いじめ・性非行。特に地元生にはほとんど見られない地元商店での万引きは地元の生活に慣れるまで多く発生する。
25	生活指導の面などで何かあったとき、保護者と相談が出来ない。

さらに，留学生の受け入れに関してもどのような子どもを受け入れるのかということを，管理職のみならず，全教員も含めて決定することが今後の課題となろう。それは，留学生の質の変化が，他の社会諸階層からも指摘される中で，直接留学生を指導する教員の負担が一番多くなるためである。受け入れの判断基準を厳密に定めることは難しいが，教員が事前の面接の中である程度見極めることによって円滑な制度運営を進めることができる。

また，留学中における児童生徒の行動に関して，留学生とその保護者に念書を交わすことも重要である。留学中に何か問題を起こしたら，留学を取り消すとか，保護者に留学地まできてもらうといった規定を設けることによって，一定の効果は期待できる。今後の山村留学制度を発展させていくためには，留学する側に厳しい側面を見せることも重要な課題となる。それは，留学する側も留学地を選ぶであろうが，受け入れる方もどの子どもを受け入れるかを選ぶことも山村留学に送り出す側の親子の自覚を求める上で，重要だからである。

表5　内面的課題を持つ子どもが山村留学を契機として克服することに関する転出教員の意識

ケース	自由記述意見
2	自然や少人数の中で、人の暖かさ等都会では経験できないものを体験し、自分自身を見つめることができる。
3	小さい学校は、先生の目も届くし家庭的な雰囲気が効を奏していると思う。
4	不登校が全くなくなったのが良かった。その内1人は成績も向上した。
5	すばらしい事と思うが、受け入れる側は大変だと思う。
6	何故いじめられるように至ったのかによっては、同じ現象が山村でも繰り返されることもある。
7	大変良いことだと思う。大規模校では克服が難しかったと思う。
8	良い事だと考えるが問題は環境だけではないと思う。 子どもによっては自分自身について考える時間がとれたとも思う。
9	悪条件から抜け出すきっかけになると思う。
10	理想的な制度下では、問題児こそその対象者にふさわしいが、現実にはスタッフ・学校体制がそうなっていない。
11	問題を抱える子を持つ親は山村留学に救いを求めようとしている。この現実を文部省をはじめとする教育関係者は認識する必要がある。重症ではない不登校児が治った事例がいくつかある。
12	留学を希望する者の大半は様々な悩みを抱えているが、その内の9割までもが問題を克服して帰る。それは、地域の教育力と本人の「新しい出発」への決意であろう。
13	学校や家庭生活での風圧が少なく、のびのびと自然の中で生活することで、人間性を豊かにする可能性はある。
14	山村留学を希望した当初の心構えを忘れさせない。「留学生」という意識を教師も生徒も持たず、また、里親・地域の人々にも理解してもらうこと。
15	学級担任の指導も良かったと思うが、環境が変わったことにより自力で解消できたと思う。
16	地域ぐるみで、一人一人の子どもを見守っているということが、本人に良い結果をもたらしている。
17	幸いに本校では克服していけたが、もし、そのことを目標に受け入れることにするならば、別な取り組みや新しい取り組みをしなければならない。
18	精神的に疲弊した留学生が留学地で自然環境と暖かい人間関係に触れ、心身共に逞しく成長する姿に山村留学の教育的意義を感じる。
19	学校嫌いの子もいたが、自然の美しさや自然体験をするうちに次第に感動する心や他人を思いやる心が育った。
20	いじめ・不登校といった問題を持つ子供の教育のための制度ではない。
21	立ち直る子どもが多いが、その後、以前の不適応状態に戻る子どもが多い。都会の中学校の在り方こそ改善すべき。
24	確かに通学するようにはなったが、緊急避難的解決方法ではないか。次のステップでつまずくようでは、本当の解決にはなっていない。むしろ問題の解決を先送りし、より深刻な事になっていないかとの危惧を抱かせる生徒もいる。

4．内面的な課題を持つ子どもの留学と地元生・教員に与える影響

山村留学を導入した学校が最も懸念するのは，非行歴や不登校，いじめなどの内面的な課題を持った子どもを山村留学生として受け入れた場合の影響と負担である。もちろん山村留学の趣旨に適った留学者も多いが，現代教育の歪みから生じている諸問題により，環境を変え少人数の中で教育を受けられる山村留学を手段として活用しようとする留学者も年々増加傾向にある。

そのため，留学生を指導する教員は，内面的な課題を持つ子どもの留学により少なからず指導上の困難や精神的負担を感じているのが現状である。ここでは，転出教員の意識からこれらの子どもの留学が地元生や教員自身に及ぼす影響や留学生の成長についてとらえていきたい。

(1)　内面的な課題を持つ子どもの留学に関する意識

まず，子どもが山村留学を契機に内面的な課題を克服していくことに関しては（表5），全体としては内

面的な課題を持った留学生に対して積極的な効果をもたらすとする見方をしている。詳しく見ていくと，「山村留学校の地域の教育力や小規模校ならではの暖かい雰囲気が，子どもの課題を克服する手助けになった」とする意見が20％ある。農村の持つ教育力，例えば，子どもを暖かい目で見守ることによって，子どもがのびのびと生活でき，地域の暖かい人間関係，さらに，自然環境も大きな役割を持っていることを示している。

また，「農村の良さを体験し，自分自身をゆっくり見つめ直す機会」になるや，「環境が変わることで，自分も変わろうとする決意があった」とする見方もある。環境の変化が，留学生の心境の変化にもつながり，結果として内面的な課題を解決することができたのではないかとしている。しかし，「留学生の持つ内面的な課題の原因によっては，農村の小規模校で環境が変わったとしても同じことが繰り返される」と指摘する人もいる。

内面的な課題を持つ子どもが留学する場合に環境を変えることも重要ではあるが，一番大切なのは，その原因を本人が自覚したうえで，山村留学を契機に，健全な留学生活を送る決意をすることである。そしてそのために，本人・保護者はもちろん教員や地域の主だった人も含めて対応を検討することである。そうすることによって，より長期的な教育効果が得られる。

⑵ 地元生への影響

内面的な課題を持つ子どもの留学による地元生への影響を，教員の記述内容から見ると（表6），「留学生の行動面で問題があれば影響を受ける」とする意見がある一方で，「地元生には，いろいろな子どもと接することで良い刺激」になるとする意見や，「社会的な視野を拡大している」「地元生は染まりにくい逞しさがある」という意見が45％程で多い。確かに一面では，地元生は内面的な課題を持つ子どもが転入してくることで，影響も受けるが，それ以上に全く異なる環境で育った留学生から，良い刺激を受けているという見方をしている教員が多い。地元生の持つ優しさや寛容さが，留学生のすさんだ心を癒す効果として示されている。地元生・留学生の双方に様々な影響を与えながらも，それらを含めて教育効果があるとしている。

⑶ 内面的な課題を持つ子どもの指導と教員の負担

これらの内面的な課題を持つ子どもの留学によって，教員への負担がどの程度あるのかを教員の意識から見ると（表7），「負担がある」とする教員がいる一方で，「負担を感じながらもそれを積極面として転化させている」とする教員も多い。例えば，「いろいろな指導ができる」「充実した実践ができる」「教員として力量を高められる」などである。これらの意識から，地元生だけの学校ではあり得ない負担があるとしながらも，教員としての指導力や実践力などを高める機会になったことを示している。その学校に勤めているときは負担の重さが先立つが転勤した後で振り返ると，当時の大変さが教員としての力量や資質を高めることができたという見方をしている教員が多い。

以上のように，内面的な課題を持つ子どもの留学によって，地元生や教員にも影響や負担感を与えていることは否定できないが，これらの留学生が転入することによって，積極的な効果を，留学生のみならず，地元生や教員にも与えていることが明らかとなった。

留学生から悪影響を受けながら子どもは成長していくという見方を教員が持っていることは，今後の山村留学の在り方に大きな示唆を与えるとも言えよう。単に非行歴や不登校など過去の内面的な課題を持つ子どもに対して，ただ留学生として受け入れないというような態度ではなく，これからその子どもがどのような意志を持ち，目的を持って留学するのかを見極めることが重要である。子どもが自分を変えようとする意志があれば，留学生が与える悪影響を懸念することよりも，留学生がより良い方向に成長していき，そのことが周囲に与える刺激と好影響をとらえることが重要である。地元生と山村留学生が共に成長していけるよう

表6　内面的な問題を抱える子どもの留学による地元生への影響に関する転出教員の意識

ケース	自由記述意見
2	都会の子どもが持つ積極性・発想のユーモアさは、地元生にとっては良い刺激になる。
3	行動面で問題を抱えている子どもの場合、当然周りに影響を与える。
4	行動面で問題がない場合は影響はあまりない。
5	へき地校にはやさしい子が多い。やさしさを育てることもできるし、いろんな人と触れ合える事は大切。
6	幼少時からの人間関係に新風が吹き込まれ、切磋琢磨するという良い面があった。行事への金銭的裏付けにより、地元生にも還元でき、得るものが多い。
7	留学生数が増す中で問題のある子どもばかりだと地元生に対する指導が不足するのではないか。ハキハキと自分の意見を言えるようになる。
8	地元生はやさしいので影響を受けやすいが、新しい出会いがあり、考える視点の違いを出し合えれば良いことになると思う。
9	地元生に強い悪影響を及ぼすことはない。地元生は染まりにくい逞しさを持つ。友達が増えて長期休暇中には行き来もある。
10	地元の子というよりも、集団のまとまりを乱す要因になる。
11	悪影響を受ける気配はない。逆に留学生が地元生から影響を受けている。
12	子ども達の閉鎖性が無くなっていき、非常に開放的となる。それぞれの地域の様子や言語・習慣・ものの考え方の違いにも接することができる。
13	毅然と対応すればそれ程心配はない。
14	興味を持つことに関心が深まり、事の善悪に「けじめ」がつかなくなる子どもがいる。
15	特に見当たらない。
16	留学を終えてからも夏・冬休みに遊びに来ているので、大変良いこと。
17	不登校の子どもは留学してきて本当に良かったと思う。いじめられる子どもは留学は有効だが、いじめる事ばかりする子どもには留学を解消する方がよい。
18	地元生は物の見方・考え方・生き方等を学び、社会的な視野を拡大している。留学生の言葉遣いの粗野な面や礼節作法の欠如等の悪影響を受けている。
19	留学生が来ることで単式を維持できる。少人数だと社会性は育たないし、気心がよく分かる者ばかりなので、留学生によって言語が今以上に必要になる。
20	地元生は、全く違う環境で育った留学生の良さを取り入れることにより、積極性が増すもの
21	影響を受ける生徒と自分を失わない生徒と一様ではない。
22	このようなことは、在校中にはない。
24	地元生の間でもいじめが存在することから、いじめの要素を持ち合わせる留学生が来ることで問題がより複雑化することがある。山村のいじめ問題は、家族同志が絡んだいじめだけに解決が難しい。例えば、入植時期、貧困度等の絡んだいじめは根本的な解決は難しいところに、新たな因子が入ることで複雑化することもある。

な環境作りと教育的な配慮が，今後の課題になろう。

5．山村留学を契機とした転出教員の意識の変容

(1)　教員の山村留学への関与とその影響

転出教員から見た山村留学制度に直接携わったことによる積極面を見ると(表8)，次の3つに大別できる。第一には，留学修了生が「再度S町を訪問してくれる」ことである。その「元気な姿を見せてくれる」ことが，教員として何よりも嬉しく，他の学校では味わえない嬉しさがあるという。「道外にも自分の教え子がいる」ことや「S町に就職する子どもがいる」ことが，山村留学制度に携わったことの喜びとなっている。さらに，

表7　内面的な課題を持つ子どもの留学による教員の負担に関する転出教員の意識

ケース	自由記述意見
2	里親との連絡を密にするとか、親元への連絡を欠かさないように配慮する位であまり負担とは思わない。
3	当然負担はかかる。
4	負担は多少あるが、留学がその解決になるのであれば、このことが教育の仕事であり、立ち直っていく姿を見るとき、仕事のやりがいも感じられる。
5	負担はあると思うが、いろんな子どもがいるわけだから教師も教育公務員として努力しなければならない。
6	学級づくり・学校生活への適応指導・複式授業の教科内容上の配慮・協議会の事務・親元への通信発送等、教員への負担は多い。
7	いろいろな指導ができる。
8	現場の意見を教委等が聞き、一方で話が決まり、教員は後から聞く等の行政優先がないことを望む。
9	負担はしょうがないが、優秀な子どもが来ることで成績が低下する等、地元生が不利益を被るのはどうか。留学生をちやほやする雰囲気が無かったわけではない。
10	教員の負担感は、都市の大規模校に課題を持つ子供がいる場合と全く同じ。1人のために学級全体がぶちこわしになる例はよくある事。
11	落ちつくまでには、正直なところ児童生徒指導上の負担はある。
12	進学指導や願書・調査書の事務手続きが大変。
13	家庭との連絡・事務手続き・会議が多い・募集活動が大変。
14	進路指導面。
15	学級担任には負担がないとは言えない。
16	負担はあるが、教師として充実した実践を行うことができる。
17	大きな負担を負う。
18	問題を抱えている子どもは、担任教師へ心を開くのに時間を要し、学級経営上気苦労が大きい。
19	地元生との和を図るのに時間がかかる。
20	負担は全くないとは言えない。 親元を離れてきているという面から精神的に気を使うことはある。
21	児童生徒指導等では負担は過重だが、反面、教師として実践的な指導力を高める絶好の機会である。力量を高めた教師が多い。
22	その様なことはなかった。
23	一人でも子どもが増すことは、学習指導・生活指導に於いて負担が多くなる。
24	教職経験の差で大変な負担になることはある。山村留学制度を取り入れている学校は、比較的若い先生が多いので色々な問題が先生も巻き込んで複雑化する事がある。いずれにせよ教師の指導力が必要である。

山村留学を修了した現在も，手紙などの交流が続いているという人もおり，山村留学制度によって培われた教員と子どもの信頼関係の強さを示している。

また，第二には，子どもの成長に関することを挙げ，「留学生活を頑張り抜いた成長」や「体験学習を通して子どもが大きく成長」していったことを積極面として挙げている。教育職に携わる者であれば，誰もが子どもの成長に喜びを感じるであろうが，山村留学制度においても子どもが成長していく姿に立ち会えることを喜びとしてとらえている。

さらに第三には，留学生の親からの感謝の言葉を受けたことを挙げている。山村留学という特殊な教育形態をもつ中において，日常的に接することのない留学生の保護者が感謝してくれることは，教員自身の自信や喜びとなっている。

以上のように，学校や教員への信頼が失われてきているとされる現代において，山村留学を通した教員と

表8　山村留学に直接携わったことによる積極面に関する転出教員の意識

自　由　記　述　意　見
・留学生の再来訪・交流に関すること
担当した留学生の1人が卒業後、思い出の地として再度来た時、元気でやっている姿に接して嬉しく思い出した。
「来て良かった」という子がほとんどで、嬉しく思った。自然のない都会から見ると田舎は住んでいると言うだけで本当に感動する毎日のようだ。日本各地に知り合いができたり、便りを頂くと大変嬉しくなる。
卒業生が訪問してきたり、S町に就職した姿を見るとき、喜びはひとしおのものがある。
自分も子ども達も北海道のすばらしさを認識させられた。現在も交流が続いている。地元生と留学生の出身地へ遊びに行った。
3月に元気に帰る留学生、また残る留学生を見たときは嬉しい。卒業生を出して道外にも自分の卒業生がいることは自分自身の喜びでもある。卒業後、学校に来てくれることが一番。
立派な成果を残した子どもや、手紙等で近況を知らせてくれたことが嬉しかった。
卒業生が再来訪してくること。S町で就職したこと。子どもが見違えるように成長し、親から感謝されたこと。各機関の協力を得て毎年留学してくるようになったこと。
立派な社会人となって来遊したり、近況報告を受けたとき、最大の喜びと生き甲斐を感じる。
卒業して成人しても、いまだに連絡をくれる。
・子どもの成長に関すること
年度途中・手紙で希望し来校した子どもとの出会い。 厳しい生活を1年間を頑張り抜き、精神的人間的成長には頭が下がる思い。
一人一人の生徒が目標をもって生き生きと学校生活を送り、色々な力が伸びいく現場に立ち会えることが、楽しい。
道外の中・高校を視察できたこと。留学生との出会い別れを通して地元生とより心が通いあったこと。 体験学習を通して、子どもが大きく成長していった。
父母が感謝してくれること
留学生と教師の触れ合いが親密なことに、父母が大変感謝していくこと。
自分自身の自然観が変わり、深まっていった。留学生の親から感謝の言葉を聞いたこと。
留学生が少年の主張大会で全国大会に出場したこと。演劇活動の十勝大会で最優秀賞に選ばれたこと。様々な自然体験学習や人材派遣講座などで習得した経験は忘れ得ぬ思い出として残ると思う。
父母が真摯に協力してくれたし、親子留学家庭が地域に飛び込んでくれたことは、迎える側にもそれ相応の責任を感じた事で、好ましい雰囲気があった。
へき地校特有の閉鎖性が、留学生受け入れにより、活性化につながる。

子ども・親との人間関係・信頼関係の強さからすると，現行の学校教育の在り方に示唆を与えているとも言えよう。

⑵　山村留学を契機とした家族観・学校観・教育観に関する意識の変容

山村留学を契機として親子・家族の在り方に関する意識を見ると（表9），「家庭教育の大切さ」や「都市の家族関係の希薄化」「親子の対話の重要性」等，さまざまな意識が見受けられる。これらの親子・家族像から，「義務教育期間中は親元での教育が望ましい」という教員も数人いる一方で，「親と離れて生活することの効果」を積極面として挙げる教員も多い。いずれにしても，家庭教育の在り方を改めて考えさせられたとする教員が多いことが分かる。

次に，山村留学を契機とした学校観・教育観の意識の変容を，教員の意識からとらえると（表10），最も多いのが，「自分の視野の狭さ・発想の貧困さ・価値観の相違」を挙げた教員が20％程いる。さらに，「自分自身を磨くことができた」など精神的向上を果たした教員も数人おり，山村留学を契機に価値観やものの見方に変容があったとする教員が多いことが分かる。また，「自然や体験学習，地域ぐるみの学校教育の重要性」

表9　山村留学を契機とした親子・家族の在り方に関する転出教員の意識

ケース	自　由　記　述　意　見
2	低学年での留学はどうかと思う。高学年では子どもにとってもプラスの面は沢山ある。
4	留学生について見るとき、他人の家族の中での生活は家族を見直すことになり、大変よい。
5	幼い小学生の段階から親と離れて留学してくるというのはどうか。 親子で来る留学には賛成。
6	どのような目的を持って留学を希望するのか、親としてしっかりとした考えを持って欲しい。親子関係・絆をしっかりつくりその上での留学であれば、子どもは心も体も逞しくなると思う。
7	家庭教育の在り方の大切さ。
8	子どもが落ちついているのは家庭かなと感じることがよくあった。
9	できれば、中学時代は親と一緒に生活するのが普通であると思った。
10	都市は、子どもを育てる場としてふさわしくないこと、特に、家族関係が希薄。
11	この10年、留学生の身体も心も弱くなってきたことが分かる。留学生の親たちの感覚も大きく変化している。
13	困難があってもわが子はわが家で育てることの原則的重要性を再認識した。
14	里親制度における留学生と里親との間に生活上のトラブルが生じ、学校側として対応したこともあった。
15	地元の親子・家族にとって良い意味での大きな刺激となったように思っている。従来の生活パターンを反省しながら進めようとしていた。
17	まさに「可愛い子には旅させよ」である。親と離れたからといって親への愛情が薄れることはない。
18	里親が我が子同様に留学生を取り扱うようになり、望ましい家族関係が確立されてきている。
19	もし、できることなら親子で1年、半年くらい留学できたらと思った。
20	親子の対話の重要性。家族と離れて、はじめて家族の良さが分かるのではないか。
21	両親とも高学歴・社会的地位が高いなどが感じられるが、実際の家庭・家族の在り方は判断できない。
22	里親になった家族が分け隔てなく真剣に取り組んでくれたこと。
23	留学家庭がいかなる事情があっても、小中学生までは親元で教育するのが望ましい。
24	教育環境としての家庭の姿が見えなくなってきた。親の都合での留学もかなりある。子どもの教育は誰が責任を持つのか不思議に思った。いずれにせよ、日本の家庭教育の縮図を見る思いがした。

に気付いた教員が4人，現行の教育制度の矛盾や疑問を感じた教員も3人おり，約30％の教員が山村留学を契機に学校教育，及び教育活動の内容面について意識の変容が見られた。

これらの学校観・教育観の意識の変容は，これまでの教員の教育実践や児童生徒指導面，さらに，教育職に携わる教員としての在り方に関して，意識変革の必要性を説いている。

6．転出教員から見た山村留学制度発展の課題

地元生・山村留学生の成長や教師の意識の変容をもたらすなど，山村留学の教育効果やそれによる喜びも明らかとなった。さらにこの山村留学を一層発展させるために，今後の在り方や課題も指摘されている。

教員の記述から山村留学制度の今後の在り方を見ると（表11），問題点も含めて実に多様な意見がある。山村留学制度の今後の課題・在り方として，「制度運営上での改善」に関する指摘が多い。学校教員の共通理解，里親の確保・新規発掘，地域全体の理解，各関係機関の連携・協力態勢の確立等を挙げている。また，各関係機関との意見交換や山村留学に熱意ある教員の配置，山村留学を教育行政として制度化した予算配分を挙げている。さらに，極少数の意見であるが，留学期間が原則として1年間となっていることで，期間を厳守するような態勢にした方が今後の山村留学制度の在り方として望ましいとする意見がある。この留学期

表10　山村留学を契機とした学校観・教育観の転換に関する意見

ケース	自由記述意見
2	自分も含めて山村の子ども達の視野の狭さ・発想の貧困さを考えさせられた。
4	学校の教育条件として、小規模校程教育がやりやすく、いろんな条件を持つ子どもが留学してきても、一緒にやっていけるところだと思った。
5	人間の成長において、自然は不可欠なものと思う。
6	楽しい6年間を過ごすことができ、自分自身も丸い人間になったように思う。
7	入試制度の違い等を経験し、価値や発想の原点の違いを感じた。そのため、自分自身を磨くことができた。
8	受け入れ前は子ども像も分からず、反対することもあったが、受け入れてみるととても可愛い子ども達だった。
9	留学生を嫌うということではないが、公立学校は、地元生のためにあるべきだということを強く感じた。
10	山村だけではなく、都市の子供も現代社会の歪みを受け、広く日本の子どもの現状が浮かびあがったこと。地域の自然を理解するために、学校に課せられたカリキュラム・規制の大きさ、学習指導要領への疑問が芽生え、行政の教育に対する制約の大きいこと。
11	教師業に就いていると、学校側から子どもを観る習慣が付いてしまうが、里親として留学生の世話をすることとなって、子どもの側から学校が観れるようになった。子どもの立場、親の立場から学校を観ると、教師時代には気づかなかった学校の姿を観ることがある。
12	体験学習の重要性を強く感じた。
14	制度そのものについては、大きな意義があるが、直接携わってみると、そこには、様々な人間関係とか、教師同志の価値観の問題・教育現場と教育行政との意志疎通、また、里親やセンター等、幾多の課題はあったが、何れにしても「子ども」に視点を置き、前向きに考えていくことが大切ではないか。
15	地域ぐるみの学校教育を具体的に進められたということは、すばらしいことであったと思う。
17	新たに教育全般を考え直すことができた。校長の姿勢が、山村留学や学校を変えていくものだと実感した。教育は理論ではなく実践なのだと実感し、100％満足できる実践はないものという前提に立つことが大切ではないか。
18	単に地域における学校教師という偏狭な考え方から、地域社会の全体的な活性化を思考したり、全国的な視野で教育を洞察するようになってきた。
19	自然を体験することで、すさんだ心もきれいになっていくと思った。
20	公教育という立場から、学校間交流の重要性、特に自ら学ぶ力の育成、体験学習の大切さを感じた。
21	「学校は授業を通して子どもを変えるところ」という都会の学校はどんな授業をしているのだろうか、親はどんな子育てをしているのか、疑問である。在校中の学校担任教師への不信感が異常に激しい。
22	幅の広い考え方で教育をする心の広さが出来た。
24	特にない。

間については，さまざまな見方があろうが，その実施地域に見合った態勢にする検討が必要となろう。

また，「留学生の受け入れの改善」に関する指摘がある。それは，目的意識を持った留学生の受け入れに関して，受け入れ段階での選定の工夫を求めていることである。ただ単に数合わせの留学生受け入れではなく，留学目的の決意を確認するとともに，留学目的を持った子どもを受け入れることが，今後の山村留学の在り方として望まれるとする教員が数人いる。

今後の課題として，第一には，児童生徒指導上の困難点から，留学生の受け入れに関して管理職のみならず，全教員を含めて留学生を決定することである。それは，直接指導にあたる教員の精神的・身体的負担の軽減を図ることや，教員がある程度子どもを見極めることで留学中の指導が行いやすいといった側面があるからである。

第二の課題は，事前に協議の上，他の都府県に関する高校入試制度の取り扱いを留学校では行わない，あるいは，教員の極度の負担の軽減を図る旨の規定を設けるなど，本来の山村留学の主旨に立ち戻ることである。

表11 転出教員から見た山村留学の今後の在り方

ケース	自由記述意見
1	小中学生の時期は親元で家庭教育を十分なされるべきと思う。
2	里親・地元生よりも数が増えること・留学生の種々の問題等、決して良い面ばかりだとは思わない。センターで子ども達の世話をするのも大変良いと思うが、やはり里親制度が特に小学生では理想だと思う。
3	不登校だった子が、山村の小規模校では元気に通っている事実は素直に認める必要はある。その受け皿や対策については、文部省等の行政が行うべきことであり、山村小規模校の責務ではないと思う。
4	留学生は集団で生活する場面も必要と思う。
5	学校教職員の共通理解、町の予算付け、里親の確保、地域全体の協力体制が必要。誰でも受け入れるのではなく、ある程度選考できるシステムが必要。協調性のある自然体験等に意欲のある子を受け入れるべきである。
7	現在の勤務校でも東京と北海道の子どもの交流があるが、短期間なためにただの遊びが中心。生きる価値観や広い視野を持つためになら、山村留学は日本社会に大きな意味を与えるだろう。多くの広がりを期待したい。
8	この制度を長く続けるためには、地域や教委・学校・留学生の親が協力しあうことが大切だと思う。自分の意見を言うことは大切であるが、全体を見、長い年月を見据えて前向きな意見交換をすべきである。
9	各種行事で子どもも負担が多かったように思う。
10	山村生活と自然体験で、都会で育てられた感覚が崩れる経験は、何にも代えられない。緊急避難的に学校の存続を成し得たとしても、山村留学の本来の意味からは遠い。それは、学校以外の公的な体験・生活施設だと思う。
11	本来の趣旨に叶った子どもが留学できるようにＰＲや受け入れ段階で十分な配慮を工夫すべきである。 山村留学を表面的に見ると様々な見方ができると思うが、根本的な背景を見落としてはならない。時あたかも、国際的な食料問題から農村が見直され、「都市と農村の連帯と共生」が叫ばれる時代となった。山村留学制度の効果の淵源となった「農山村の持つ教育力」を見直し、山村留学事業の制度的な援助を検討する時期にあると考える。
13	義務教育は親元から通学するという学校教育の大原則を崩すもので問題がある。子どもの一時的逃避や親の無責任な「託児」的考えも見られるが、親なら我が子ともっと心底から格闘して解決することが基本であろう。
14	山村留学制度は、基本的には1年間となっているので、その辺で制度の徹底の必要。里親の高齢化と受け入れ体制・新規受け入れの拡大の問題。
15	親から離れて生活することの不自然さについては、はじめ理解できなかったが、里親の考え方や子どもとの接し方によってある程度は解決できる。地域がある程度同じレベルで子どもと接することが大事である。
17	もし、いじめ・不登校児を対象に山村留学をするというのなら、新たな制度を考え直していくしかない。町・町教委・地域住民の力強い支えがあって発展するものと思う。特に学校の姿勢や取り組みは重要だし大変だが、負担が大きくなるのは当然である。この制度はすばらしいものであるが、学校だけの情熱だけでは解決しない。この制度は、どんな教育を提供できるかが問われている。「学校とはなにか」、「学校はどうあればよいか」、「教員はどんな資質や能力が必要か」、「教員はどんな生き方をすればいいのか」等、今改めて厳しく問われている。
18	山村留学事業に熱意ある人員を配置する必要がある。制度を発展させる立場から、地域住民の意識強化を図る必要がある。山村留学制度を都市と農村の青少年教育・文化交流事業とし、文部省の教育行政の一環として、実施町村への補助金を助成することが必要。
19	自然体験をするために、学校では別予算があり、それにより様々な体験をしていたが、町の協力が必要である。
21	留学生集め重視のため諸々の問題が生じているが、改善の動きが弱い。
22	多角的検討を要し、教師・父母共に精神的に大変。PTA・地域との会合の数が多く、共通理解までに時間を要した。
23	里親は、物心両面で大変だったと思う。複式授業と単式授業とでは、カリキュラム編成・指導法・個別指導等が全く異なり、教師の負担も軽減され、子ども達も能力別の学習が可能になり、教育効果のメリットが多いと思う。
24	地域振興・学校規模の適正化を願って始まった本制度は、主導権が、地域から行政に移り始め、地域住民と行政の意識のズレが生じ、それと共に学校での留学生の決定の関わりが希薄になってきたように感じた。地域振興の問題、ほとんどの留学生の諸問題、教育環境・学校教育問題の解決を先送りし、より複雑化する恐れがある。

第三の課題は，留学生を受け入れる段階において，留学生本人及びその保護者と，留学中の行動に関する念書を交わすことである。留学中の行動面で他人に迷惑をかけたり，問題行動を起こしたときには，保護者にきてもらうことや，留学の解消といった手段をとることを，本人及び保護者にあらかじめ納得してもらうことによって，一定の教育効果を達成できる。

第四の課題は，不登校等内面的な課題を持つ子どもの留学には，留学生本人の強い目的意識と本人の現時点での情報を詳しく把握した上での受け入れをすることである。留学生の過去の状況がどうであってもそれは問わないが，山村留学に参加する目的意識を重視することによって教育効果がかなり期待できる。

第五の課題は，各関係機関との連携強化の課題である。連携された制度運営上の改善によって，安定的な山村留学の継続と，目的意識を持った留学生の受け入れをすることができる。

以上のように，転出教員の意識から見た今後の山村留学制度全体の在り方・課題を明らかにし，各関係機関の共通理解や連携態勢などの制度運営面の改善と，誰でも無条件に受け入れるのではなく，目的意識を促すことができるような受け入れの工夫の必要性を指摘した。これらの課題を受けて，今一度山村留学制度の今後の在り方について各関係機関での議論が求められよう。

おわりに

以上本稿では，転出教員の意識から，山村留学の教育効果と山村留学を契機とした教員の意識の変容をとらえてきた。教員自身が実際に勤務しているときには，負担感ばかりが先立つが，勤務地を離れて他の学校に勤めると当時の子どもとの出会いやさまざまな経験を積極的に評価している教員が多かった。教員が，留学生の指導，さらには学級経営においての困難や苦労を感じながらも，地元生と山村留学生の成長を感じ，また教育専門職としての実践力や指導力を高める機会となったととらえていることが明らかとなった。教員自身も山村留学制度を契機として学習し，教員として成長したのである。

一方山村留学の一層の発展のために，今後の山村留学制度の課題・在り方として，制度運営上の改善も必要となる。例えば，山村留学では目的意識を持たせると共に，面接や念書の確認など目的意識を持った留学生を受け入れる工夫をすることも重要な課題であることが明らかとなった。このように，内面的に問題を抱えていたり，生徒指導上の問題があるなど，山村留学に参加する児童生徒の動機も変わりつつあるが，これに対する対応も必要となっているのである。

山村留学の役割も拡大してきている中で，学校現場や地域の混乱や苦労も多くなっている。だが，それらを踏まえながらも，転出教員によって山村留学の積極面がとらえられていることは，単にこれまでの農村僻地の教育の在り方を守るだけでなく，僻地のマイナス面として言われてきた事をプラス面として位置づけし直すような新たな対応をなすことも課題となっていることを示していると言えよう。

注記

注１　本稿の事例として取り上げたＳ町立Ｕ小学校区・Ｕ中学校区は，酪農業を主な地域産業とし，北海道で２番目に山村留学を導入した地域である。1996年度の学校規模は，小学校が５学級（特学１）で，全校児童数47人（留学生14人），中学校は３学級で全校生徒数39人（留学生14人）である。

注２　回答教員の年齢については，50歳代が８人で32％と最も多く，50代以上の回答者が全部で56％を占めている。回答教員の職階は，一般教諭が13人で52％で，残りが管理職である。

本稿は，川前あゆみが全文執筆し，玉井康之が校閲したものである。